

熊野の  
木林から

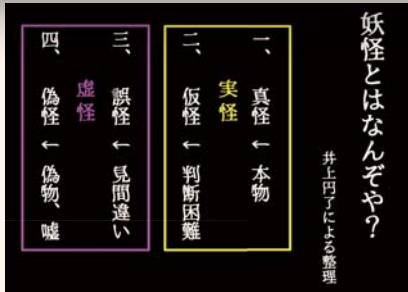
# 怪熊野

「真」  
其の(四)「怪」

和歌山大学  
システム工学部  
環境システム学科  
中島敦司教授



前回に引き続き、南方熊楠の話が続ける。熊楠の残した妖怪研究を分析すると、熊楠は妖怪現象を大きく二つに分けて扱っていたようだ。それは、「妖怪とはなんぞや？」



井上円了が整理した妖怪の分類。本物を認めなかった熊楠とは対照的に、本物である「真怪」を認めた点は、さすが宗教学者である。

怪は勘違いや、思い込みである」と「人間が作り上げた物語(トリック)である」というものだ。さらに、大前提として「妖怪は自然現象である」としていた。妖怪話は、意図的な作

り話を除くと人間の無知さが故に妖怪だと認知してしまった自然現象だということになる。

さすが、博物学として世界的に有名な熊楠である。事象と認



熊楠は妖怪の多くが自然現象の見間違いであり、アナグマは見間違いされやすい代表だと考えた。見世物の多くがアナグマのミイラなどであったためにガッカリしたことも影響したようだ。

知の関係性を意識した論の展開は理系である。熊楠に対し、明治時代の宗教学者であった井上円了の整理も非常に興味深い。円了は、東洋大学の創始者の一人で哲学者でもあった。円了は、妖怪現象を大きく二つに分けている。実際の怪異である実怪と、怪異とは言えない虚怪だ。虚怪の中の意図的な偽物については熊楠と同じように扱い、これを偽怪と整理した。また、見世物的なエンターテイメントだけでなく、子どもへの教育、禁忌の警告など教育的な意味合いを持っているものの存在を認めている点では熊楠も円了も共通している。

一方、見間違いも偽物の一つであり、円了は誤怪と整理している。さらに、本物の怪異と言いたくならない不思議な現象の中には、科学的分析によつて誤

怪に分類できるものが含まれていて、仮怪と整理している。円了は、見間違いによる誤怪、人間が意図的に作り出した虚怪、科学によつて証明可能な仮怪と整理した。仮怪は実怪と虚怪の中間的な位置付けで、科学で証明できれば虚怪に、証明できなければ実怪と位置付けた。さらに、円了は本物の存在を否定せず、誤怪、偽怪、仮怪以外のものを真怪として整理している点は、さすが宗教学者である。熊楠とは対照的に文系の態度である。

科学で全てを説明できると考えた理系の熊楠と、科学の及ばない領域を認めた文系の円了には確かに違いがある。しかし、妖怪現象を科学で紐解こうとしている態度は共通している。筆者は、個人的には真怪の存在を信じていたい気持ちがあるが、科学が進めば真怪も誤怪になってしまうことも、また科学者の端くれとして理解している。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール  
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30〜50日は訪問し、研究する。

